

深イ〜話!

No.3

わたしが大好きなお話で、絶対いつかご紹介しようと思っておりました。

明治23年、およそ600名の使節団を乗せた、トルコの軍船エルトゥール号が、公務を終え帰国するとき、嵐にあい、和歌山県の小さな村の海岸で座礁してしまいました。多くは一瞬にして命を落としたに違いありませんが、一部のトルコ人は^{かしのざき}榎野崎というところまで必死に泳ぎ着いたそうです。



一人のトルコ人が崖を這い上がって倒れていたのを、灯台守が見つけます。このときから、村長の指揮のもと、島民による救援活動が繰り広げられるのです。救援活動に従事した高野友吉が晩年、このような証言を残しています。

「まず生きた人を救え! 海水で血を洗い、^{へこおび}兵見帯で包帯をし、泣く者、^{うめ}呻く者を背負って200尺(60メートル)の崖をよじのぼるものは無我夢中である…。とにかく生存者79名を小学校と大龍寺に収容した。」

生存者を島に引き上げた後の島民たちの対応も迅速かつ適切でした。冷え切った身体を人肌であたため、精魂の限りを尽くしています。貧しい村だったので、十分な食料もありませんでしたが、非常事態に備えていた^{かんしょ}甘藷や鶏など一切を提供し、トルコ人の生命の維持に努めたのです。しばらくして、事故に気付いた明治政府が援助の手を差しのべたので、助かった人たちを無事にトルコに送ることができました。

昭和60年、イラン・イラク戦争のとき、イラクのフセイン大統領が、「今から48時間後にイラクの上空を飛ぶ飛行機は民間機でも撃墜する。」という無茶な声明を発表しました。当時の日本政府は急な事態に対応が遅れ、残された日本人を救援する飛行機を飛ばすことができませんでした。

現地の日本人は空港に集まりましたが、どこの航空会社も自分の国民を乗せるだけで精一杯で、日本人が乗れる飛行機はありませんでした。

そのとき、時間ぎりぎりにトルコの民間機2機が到着して、日本人を救出してくれました。外務省が問い合わせるとトルコ政府は、

「私たちはエルトゥール号のことを忘れていない。だから、日本人が困っているのを知って助けに来た。」と話してくれました。

トルコでは教科書にもエルトゥール号の話が載っているそうです。